

田中研新聞

創刊号

二〇一三年九月一日創刊

二〇一三年九月一日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室
毎月発行
http://carnation.is.konan-u.ac.jp

三回生配属決定

このたびのゼミ配属で、田中研には八名の学生が配属された。

ここ数年、男性ばかりだっただけに、二名の女子の配属には田中教授だけでなく、上級生も驚きを隠せない様子だった。田中教授によると、情報システム工学科の頃は第一希望で入りきれない学生も多かったが、近年、入りやすい状況になっているという。

また、研究内容の影響か、女子の希望者があまり多くないが、田中教授は二人の娘の父親でもある。女子の気持ちもよくわかっていて、安心して希望してほしいということだ。

今後のスケジュールとしては、まず九月に歓迎会を生協二階のパーティールームで行い、教授だけでなく四回生や院生とも交流を図る。三回生の間は、英語と日本語の基礎力の充実を図る。

田中研新聞発刊

甲南大学知能情報学部田中雅博研究室では、このほど毎月定期的に電子新聞を発刊することにしました。当研究室の活動を広く知ってもらおうとともに、研究室のOBとつながりを保ち、フィードバックを期待したいからです。

とともに、OpenCVやRTMIDルウェアのプログラミングの勉強を行う。

二月には、研究室恒例のゼミ旅行を行う予定。今年には沖縄に行く年だということだが、実際には、学生たちが主体的に決めることになるという。どこにいくにしても、旅費を貯めておくことは必要だ。

さて、研究とはいったい何なのだろうか？これは哲学的な難しい問題で、そう簡単に答えの書ける問ではないだろう。もっと身近には、卒業研究とは何なのだろうか？

文系のある分野では、学生にテーマを自由に決めさせ、アンケート調査をし、図書館で調べ物をし、自分で文章を書き、先生が少しコメントを言って修正して提出といったものが多いと聞く。これは、ある意味本来の卒業研究かもしれない。

このような形で発信をしていきますので、是非ともポジティブな形でフィードバックをお願いします。なお、ここに掲載する内容については、いまでもありませんが、田中の個人的な活動であり、学部やさらには大学の方針に必ずしも沿った

い。しかし、工学系の卒業研究はそれではすまない。通常は、高度な専門的な内容が含まれ、指導教員が考えた内容に従ってプログラムを作り、実験をするといった研究も多い。自分で主体的に考えて研究を進めることができる学生は滅多にいない。それを教員は織り込んで研究指導をする。しかし、卒論を終えたら、それを自分のものとして次に進めるだけの力がついている(はずである)。だからやるのだ。

卒論本来の、自力で研究を考えるとということ、専門性が高いことを教員から教わりながら進めるという両面が要求される。そのためにはそれだけの覚悟をして、研究のための時間を作ることが先決である。

大畔君、ロボット学会で発表

M1の大畔君、ロボットの学会で発表へ九月四日から六日の間、首都大学東京

ものとならない場合もありますので、その点ご理解ください。

皆様からの情報提供をお待ちしています。なお、掲載するかどうかの判断や多少の文言の修正は当方で行いますので、あらかじめご了承ください。

(八王子市)で開催される日本ロボット学会の学術講演会で、「レーザー距離センサによる反射が不確定な環境下での移動ロボットの自己位置推定」で発表を行う。

大畔君は田中研配属以来、ずっと自己位置推定の研究を行っているが、今回、よい結果が出るようになったため、学会発表をして、研究の一つの区切りをつける。次のテーマはまだ確定していないが、研究の流れからすると、SLAMだろう。



甲南Todayに田中教授登場!

甲南学園の広報誌に「甲南Today」があるが、この九月頃発行されるものに田中教授が特集されて登場するという。教育と研究について、インタビューに基づいた記事が掲載される。

田中教授が、どのような方針で、どういう気持ちで学生の教育をしているの

か、まさに、核心をついたインタビューだったというから楽しみだ。取材のときにたまたまゼミ室にいた大畔君と野々口誠人君もKORoとともに写真入りで登場する。

みんなのニュース

田中教授、高島屋で「森伊蔵」当てる!

焼酎には、プレミアム焼酎といわれる銘柄がいくつかある。生産量が限定されていて、定価ではなかなか入手できず、市場価格は定価の数倍になっている銘柄だ。たとえば、最も人気の高い森伊蔵は、七二〇ミリリットルのものが定価二六九八円なのに対し、流通価格は一七〇〇円前後だ。

森伊蔵は、定価販売のものを高島屋を通して抽選で当たった人に少量販売している。店によって異なるが、田中教授の住居のある岡山の高島屋では抽選倍率が約一〇倍から一五倍になるといふ。今回の抽選にたまたま初めて応募した田中教授は、見事射落としたようだ。

おこぼれにあずかりたかったら、岡山の自宅まで遊びに来てほしいということだ。

ちなみに、田中教授は今まで森伊蔵を二回賞味した経験がある。一回目は入試実施委員長だったときに、忘年会で森伊蔵が飲める店

に行った。そのときは、森伊蔵の意味を知らず、なんと高い忘年会か、と不満のみ残ったらしい。二回目は出張で福岡に行った昨年、一人で夕食のためにふらりと入った店で森伊蔵が千円で飲めたので、やった!とばかりに賞味したという。

お勧め本

谷本真由美「キャリアアポルノは人生の無駄だ」、朝日新聞出版

キャリアアポルノとは、この人の考えた言葉で、いわゆる「自己啓発書」のことである。自己啓発書が悪いものだと普通あまり考えないだろう。特に、積極的にそういうものを読む人もあるに違いない。しかし、それはポルノと同じで、意味がないというのだ。

こういう本は、一度読んで終わりでなく、同類の本を次々に読む。何度も自己啓発するということは、本当に自己啓発になっていない証拠だといふ。非常に手厳しい。私の書架にも、そういう本が散見される。「スタンフォードの自分を変える教室」なんて本が、読まずに積んである。

この人の思想の根本には、アメリカとは正反対のヨーロッパ人の人生観があると思う。この人はイタリアでそれを身につけた。こういう本を読んで啓発されるのが全くない人には、確かに人生の無駄と言いつてもいいだろう。しかし、そういう本を読んでは、発奮し、何らかの行動を開始することがないともいえない。

発奮し、何らかの行動を開始することがないともいえない。

就職活動について 就職とはいったい何だろう?この問いかけに、明確に答えを持っているだろうか?いろいろな断片的な言葉が頭の中で渦巻いている。知名度の高い会社に入りたい。親のすんでいる地元の会社に入りたい。給料が高い会社がいい。ブランドといわれる会社には入りたくない。福利厚生が整っている会社がいい。残業はあまりしたくない。昇進が早い会社がいい。・・・

そういう会社を見つけたら、よしよし。そして、運良く、就職活動が実って、就職できたとしてしよう。来年四月。入社。研修。知らない言葉がたくさん出てくる。こんなことも知らないの?馬鹿にされた。講師の顔が嫌いだ。声も聞きたくない。仕事はわからない。おもしろくない。何のためにこの会社に入ったのか?・・・ああ、もうやってられない!やめた!

こういう経過をたどる学生が後を絶たない。何が悪いのだろうか? まず、就職とは何か?そのところを学生時代にしっかりと押さえておいた方がいい。会社は利益を追求する組織である。そして、自分が、家族とともに食べていくために会社で働く。働いて食べていくだけの利益を会社にもたらしてこそ、

それに見合った給与が与えられる。自分が得意なことをして会社に利益をもたらすことができるれば、君も会社もウィンウィンの関係になる。そういう会社を探すというのが就活だろう。そして、それがわかっていけば、採用担当者君の気持ちも伝わるだろうし、好印象を与えることもできる。

ここまで話を理解すれば、どういうことを就活ですればいいのか、自ずとわかるだろう。まず、会社に利益をもたらすような能力を持つこと。それはプログラミングであるかもしれないし、対人能力であるかもしれない。その根底に必要なことは、しっかりと言語能力や計算力、ものごとをきちんと考えることのできる頭脳である。どこの組織でも、深い思考ができる回転の速い頭脳が最も必要である。うちのゼミでは、一年半かかって、こういうことを鍛えていく。(田中雅博)

編集後記

学生の提案で新聞を発行することにりましたが、今回は私が試作しているうちに作成してしまいました。そのため、学生の書いた記事がないのですが、次号からは私と学生の共同制作のものにしていきたいと思っています。デザインも内容ももっとも魅力的なものにしようと思えばできるはずなので、今後、さらに研鑽を積んでいきたいと思えます(田中雅博)。